

教育実習生の皆さんにおすすめの本を紹介していただきました。

竹内瞳 先生 (世界史)

『フラニーとゾーイ』

J. D. サリンジャー 著 野崎孝 訳 新潮文庫
『フラニーとゾーイ』村上春樹 訳 新潮文庫

今まででこれほど何回も読み返した本はありません。皆さんも是非2回読んでもらいたいです。1度目は意味不明です。でもそこで諦めずにもう一度本を開いてもらおうと、この本の魅力に気づく…かもしれません。

内容は一言で表すと「面と向かっては優しくできないもどかしい兄妹の家族愛」が元になっているストーリーです。妹はかわいいけど泣き虫で、お兄ちゃんは小言が多すぎるけど本当は優しいイケメンです。とりあえず、サリンジャーの作品を読んでほしいです。



大谷祐樹 先生 (日本史)

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス 著 ハヤカワ文庫

SF小説というジャンルではあるが、展開や結末に涙してしまう作品である。知的障害のある主人公、チャーリーは脳手術により高い知能を手にする。しかしながら現実残酷なもので、期待している生活は訪れなかった。アルジャーノンは先行実験がなされていたハリネズミの名である。物語が帰結する最後の一文が哀しい。

私は中学生の頃に国語科の先生に薦められて読んだが、今読めばまた新たな気づきが得られると思っている。これは間違いなく名作だろう。

松村晋一郎 先生 (現代社会)

『かがみの孤城』 辻村深月 著 ポプラ社

中学一年生のところが主人公。ある出来事を機に学校へ行けなくなり、いつも家で過ごしている。ある日一人で家にいると、部屋の鏡が突然輝き始め、潜り抜けてみるとそこは城の中だった。

大人である現在の自分と子どもだったあのころの両方を、同時に慰め、励ましてくれる小説！見どころは、後半。伏線がいくつも張られているため、一气読み必至です！ぜひ読んでみてください。

☆図書委員からのオススメ☆

『その日のまえに』 重松 清 著 文春文庫 B913-シ

この本は全七編からなる連作短編集ですが、最後にそれぞれの短編が一つにつながり感動すること間違いなしです。全て「人の生と死」がテーマなので重いイメージを持たれる方がいるかもしれませんが、悲壮感はないため読み終わった後に晴れやかな気持ちになります。

七つある短編の中での私の一番のお気に入り「ヒア・カムズ・ザ・サン」です。幼くして父親を事故で失い、母一人に育てられた高校一年生の息子トシの視点で物語は進行します。遅くまで仕事をして帰ってきた母親がぼろりとこぼした「お母さん、今度、胃カメラ呑もうかなって思ってるんだけど」の言葉、最近母親がハマっているというストリートミュージシャンの話。そして友人から、ストリートミュージシャンの前で涙を流しながら聞いているおばちゃんがいるとの話を聞いたトシは、いてもたってもいられず…。

軽快な文章ですが、それだけに息子と母親の愛情が強く感じられ、心を揺さぶられる作品です。

自分の人生を改めて考えさせられます。いつやってくるか分からない「その日」のために、毎日を大切に生きようときっと思うはずです。